

2021年7月25日 午前礼拝 説教者:堀希望 兄
「光の中を歩むために」

Iヨハネ1:1-10

- 1:1** 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、
- 1:2** ——このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。——
- 1:3** 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。
- 1:4** 私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。
- 1:5** 神は光であって、神のうちには暗いところがない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。
- 1:6** もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。
- 1:7** しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
- 1:8** もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。
- 1:9** もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。
- 1:10** もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

私たちは、誰一人例外なく愛を必要としています。愛は、自分一人では手に入れられず、必ず誰かがいなければ成り立ちません。愛は、物ではなく関係性だからです。

しかし、この世界で手に入るのは、不完全な愛です。それは、私たちが罪びとだからです。愛ではなく、自己中心に生きる心を持っているからです。そんな世界の中で、完全な愛があると皆さん思われますか。完全なお方はただひとり、神様だけです。神様からだけ完全な愛を得ることができます。

今日は第一ヨハネの1章から、神様が私たちに持っていてくださっている愛の関係について見たいと思います。

1. 私たちの交わりは、神様とイエス様を通しての交わり（1：1-4）

「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて——このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現された永遠のいのちです。——」（Iヨハネ 1：1-2）

使徒ヨハネがこの手紙を書きました。ヨハネが伝えようとしたのは、人となられた神様であるイエス・キリストでした。弟子たちは、3年半イエス様と寝食を共にし、イエス様を目で見て、その声を聞き、よみがえられたイエス様に触れました。2節に「永遠のいのちを伝えます」と書いてあります。私たちのイメージでは、永遠のいのちとはイエス様を自分の救い主として信じた時に約束される未来のいのちのように思えますが、

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ 17：3）

「知る」とは、「人は、その妻エバを知った。」（創世記 3：1）とあるように、知識で知ることではなく、人格的な交わりを通して心で知ることを聖書では指します。ですから、神様が私たちに与えて下さる永遠のいのちとは永遠に生きられるだけでなく、神様を知ること。すなわち神様と永遠に一緒にいて、親密な交わりを持つということなのです。

イエス様を直接見て、聖霊によって良く交わっていたヨハネはこう言います。

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。」（Iヨハネ 1：3-4）

これを読む人もまた、ヨハネがその声を聞いて、見て、さわっているようにイエス様と親密な交わりを持つためにヨハネは書きました。クリスチャンの交わりとは、神様とイエス様との交わりが必要不可欠なのです。それは、イエス様においてのみ、私たちは共通点があるからです。

私は多くの方から見て若いと思います。一回り二回り離れておられる方々もいらっしゃいます。育った背景も時代も異なります。性格も様々です。普通なら、一緒にいるような理由も場面もないでしょう。しかし、どんなに違いがあったとしても、イエス様によって救われ、同じ神様がお父様になってくださっているのです。

聖書は教会を神の家族と呼びます。家族のきずなは、表面上やビジネスの関係ではありません。相手のためにいのちを捨てる、イエス様がされた愛の関係です。イエス様を本当に知り親密になる時、同じクリスチャン同士の間柄も親密になっていくのです。その結果、「私たちの喜びが全きものとなる」と書いてあります。完全な喜びが与えられるようになるということです。

お恥ずかしながら、私自身はイエス様から目の前で声を聞き、見て、さわるような親密な交わりを持っているとは言えないのです。だからなのか、人をよく恐れます。人といて、全き喜びを味わうことは少ないです。神様との間に何一つ隔たりなくいつも親密でいられたら、もっと人を愛するようになれるのだと思います。

2. 光の道とやみの道

「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」(Iヨハネ1:5-7)

神様との親密な関係のために、まずヨハネは光の中を歩んでいるかと問いかけます。ここで言われている光とやみは、罪を犯すか犯さないかという違いだと思われるかもしれませんが、そうではありません。罪を隠しているかどうかの違いです。

6節のように、「私は神様と親しい間柄だ」と言う人がいたとして、実際生活では罪を犯して平気だとすればどうでしょうか。その人は口で言っていることとやっていることが違います。嘘です。神様の目から見て、最も大切なことは、罪を犯さない立派な人間になることではなく、罪を隠さない信頼関係を築く事なのです。

例えばお母さんと小さな子どもがいて、子どもがいつも間違えないように失敗しないように緊張しながら過ごしていたらどうでしょうか。お母さんからしたら、もっと肩の力を抜いて、お母さんを信用してほしいと思うのではないのでしょうか。心を隠していい子であろうとするよりも、悪いことをしたら心から謝ることのできる素直な子に育ててほしいと思うのではないのでしょうか。

同じように、7節には神様とともにいる光の道では「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」とあります。罪をきよめるのは、私たちではありません。イエス様です。救われても私たち自身は何もまともにはなっていません。罪を犯す性質は、新しいからだに変えられるまで変わりません。私たちに必要なのは、まともになろうとすることではなく、もっとイエス様の十字架により頼むことです。

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」(Iヨハネ1:8-10)

イエス様は私たちの罪のために死なれました。しかし今なお私たちは罪を犯しているのです。この罪一つのために、イエス様は十字架にかからなければいけなかったのです。今でも私たちは、イエス様が代わりに死んでくださらなければ神様に滅ぼされて当然の罪を行っています。ですから「罪はない」という時、誰であってもそれは嘘になります。そして、イエス様が自分のために死んでくださったことを否定していることになるのです。

だから私たちができることは二つの内どちらかです。一つは、「自分には罪はない。そんな悪いことはしていない」と罪を否定するか、「私は滅ぼされて当然の者です」と罪を認めるかどちらかです。

最初の人アダムは、神様が禁じた善悪の知識の実を食べたことを神様から指摘された時、こう答えました。

「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」(創世記 3 : 12)

自分が悪いのではない、と妻のエバに責任転嫁したのです。「罪はない」という時、もしあの時、アダムが「私が間違っていました。ごめんなさい」と言ったなら、結末は違っていたのでしょうか。

また、イエス様と一緒に十字架につけられた強盗の一人は「あなたはキリストではないか。自分と俺たちを救え」と言い、もう一人はこう言いました。「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ」と(ルカ 23 : 39, 41)。

「自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ」と言った人は、イエス様から「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」と言っていただきました。

ですから 9 節にこう書いてあります。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

「自分の罪を言い表す」というのは、神様と同じ目線で罪を見るということです。神様が嫌われイエス様が十字架にかからなければならなかったほどに汚れたものであると、私たちが自分の罪を素直に認めて悔い改める時、どうなると書いてありますか。「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」とあります。赦してくださるのです。

なぜなら、神様は「真実で正しい方」つまり公正でご自分の約束されたことに忠実であられるということです。神様の約束はいくつもありますが、罪の赦しで言えばヘブル 10 : 17 にこのようにあります。「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

人間関係でもそうではないでしょうか。友人に悪いことをしてしまつてばつが悪くなつたとします。自分が悪くてもすぐに謝れない、謝りたくない時があるかもしれません。そういう時は友人と会話をするのも億劫になり、なかなか本心を見せられません。友人と顔を合わせるのを避けたり、作り笑いで乗り切ろうとします。

しかし、勇気がいるかもしれませんが、覚悟を決めて腹を割って話し合い、正直に話して赦してもらえたならば本当の意味で友人との友情が回復され、強まるのではないのでしょうか。

罪は、神様と私たちを隔て、信頼関係をすり減らすものです。親密な関係を壊します。それは自分では解決できません。もし自分で解決しようとするなら、重い罪にいつまでも苦しむことになります。

しかし、既に神様はその代償を払ってくださったのです。イエス様を身代わりとして、私たちのすべての罪を終わらせてくださったのです。神様は罪を背負って苦しむのではなく、一緒に光の道の中で永遠のいのちを楽しむことを願っておられます。

ぜひ、ご自分と神様との隔たりを神様に打ち明けて、いただいている永遠の交わりを真っすぐに喜ぼうではありませんか。

【説教者:堺希望 兄】